

10. 日野尾地区の地蔵講と石碑

酒井 祐太朗

- | | |
|----------------|--|
| 1. はじめに | 5. 南無大師遍照金剛碑 ^{なむたいしへんしょうこんごうひ} について |
| 2. 地蔵講について | 6. 庚申講、庚申塔について |
| 3. 地蔵堂について | 7. 考察 |
| 4. 地蔵講の以前とこれから | 8. おわりに |

1. はじめに

今回の調査では輪島市門前町門前地区にうかがった。いろいろな方のお話を聞いていく中で、特に私が興味を持った門前地区の中でも日野尾区のことについて取り上げていきたい。

日野尾には、他の区では行われていない地蔵講というものがある。また、この地蔵講を行う地蔵堂というお堂の中にあった石碑、そしてこのお堂の前方にあった石碑にも興味を持ち、調査を行っていった。地蔵堂の中にあった石碑は南無大師遍照金剛碑^{なむたいしへんしょうこんごうひ}というもので、ここには二つが並んでいた。地蔵堂の前にあった石碑は庚申塔というもので庚申講というものにつながりがあることがわかった。ここではその「地蔵講」と二種類の石碑「南無大師遍照金剛碑」「庚申塔」について取り上げていきたい。

2. 地蔵講について

現在、門前地区全体の中で日野尾だけが行っている地蔵講は、一般的には地蔵菩薩の功德をたたえて営まれる法会である。

Oさん（日野尾、女性、80歳代）、Nさん（日野尾、女性、80歳代）、Sさん（日野尾、女性、80歳代）は、お地蔵さんの供養のためにやっていると述べていた。この日野尾の地蔵講は、毎年8月16日に地蔵堂で行われている。内容としては、前日の15日に地蔵堂のお掃除をして、お花とお水などをお供えし、16日の午前9時頃からお花、果物、お菓子、お茶などをお供えをして、お地蔵さんの前に墓簞を敷いて正座して、御詠歌といわれる歌をうたうというものである。日野尾でうたわれる御詠歌は西国三十三所御詠歌というもので、第一番から第三十三番までを、喉を休めながら二時間くらいかけてうたう。一番をうたう度に線香をたてるので二時間くらいかかるという。御詠歌をうたい終え、地蔵講がおわると参加者で世間話などを少しして、お供え物を参加者で分けて持ち帰る。

この御詠歌は本山とは違った御詠歌で、安寿寺という寺から習ったものであるらしい。リズムの元は本山なのかもしれない。昔はお通夜のときにもお坊さんのお経がおわった後にこの御詠歌をうたっていたと伺った。

地蔵講で御詠歌をうたうときに使う道具として、西国三十三所御詠歌、鉦（しょう）・首木（しゅもく）・鈴（れい）・数珠（じゅず）・輪袈裟（わけさ）がある。首木は鉦を鳴らす木の棒のことで、輪袈裟とは首に掛ける衣装のことである。写真 2 のように、輪袈裟を着て、鉦を置き、右手に首木を持ち、左手に数珠を掛け、鈴を持って、西国三十三所御詠歌をうたう。本来はこれに加えて服があるらしいが、地蔵講の時期は夏で暑いため、輪袈裟だけを着ているという。参加者は一人ひとりが道具を持っているので、地蔵講の日に各自が持参してくる。



写真 1：西国三十三所御詠歌



写真 2：道具の身に付け方

左下に鉦。右手に首木。衣装に輪袈裟。

左手首に数珠。左手に鈴。

2018 年 8 月 21 日 筆者撮影（写真 1、2）

3. 地蔵堂について

O さん（日野尾、女性、80 歳代）、N さん（日野尾、女性、80 歳代）、S さん（日野尾、女性、80 歳代）によると、地蔵講を行う地蔵堂の中の地蔵は、日野尾に以前あった火葬場のものや門前高校のうしろにあったものなど、ところどころにあったものを集めて地蔵堂に置いたといわれている。このようなお堂が存在するのは門前地区でも日野尾だけであると述べられていた。

お堂のつくりとしては、入口を入って正面に地蔵が数体並んでおり、その右側に石碑（南無大師遍照金剛碑）が二つ並んでいる。左側は壁を挟んで物置のようになっている。その左の壁には、「日野尾地蔵講講員名」と書かれ、地蔵講の講員名が書かれている。お堂の入り口にある「地蔵堂」という字は公民館長 Y さん（日野尾、男性、60 歳代）の父が書いたものであり、この字を書いたしるしとして、その Y さんの父の俳号である「大川」という字が右下に書かれている。



写真 3：日野尾の地藏堂の外観



写真 4：地藏堂のなかの様子

右に見える長方形の石碑は南無大師遍照金剛碑。左から第五番、第六番。

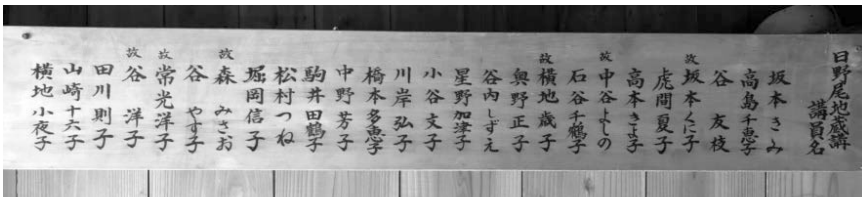


写真 5：地藏堂内にある日野尾地藏講員名が書かれた板

2018 年 8 月 21 日 筆者撮影（写真 3～5）

4. 地藏講の以前とこれから

〇さん（日野尾、女性、80 歳代）、N さん（日野尾、女性、80 歳代）、S さん（日野尾、女性、80 歳代）によると、地藏講は以前は各家から女性が出て行っていたらしく、当初は 20 人以上は参加していたが、今では 4、5 人となっている。以前は 1 カ月に一度、順番で家を決めてその家でお稽古をしたり、公民館でも集まってお稽古をしていた。昔はテープを聞いての練習もしていたという。今でもリズムを覚えられているが、以前からしっかりと稽古をしたから覚えられたらしく、稽古しないと覚えられない。また、この稽古は、娯楽が少なかった生活の中での楽しみの一つでもあったようだ。

〇さんによると、御詠歌自体はそもそも禅宗のものである。しかしながら、〇さんは浄土真宗門徒なのに地藏講で禅宗の御詠歌をうたっている。〇さんいわく、宗派は違うけれど、集落で昔からやっているから何の違和感もなくやっているそうだ。

〇さん、N さん、S さんは、ここの日野尾の地藏講は他の場所にはほとんどないもので、いままで代々受け継いできたものであるから、できることならこれからも残していきたい、もし、これから先に地藏講がなくなると寂しいとおっしゃっていた。

5. 南無大師遍照金剛碑について

『くしの郷 第六号』（2005:33）によると、南無大師遍照金剛碑は、同じ大きさの越前の笏谷石（しゃくたにいし）で作られ、総持寺の関係寺院と宝泉寺の境内の周辺に建立されており、故蔵本昌一氏によって以前その所在地が詳しく調査された。八十八基の金剛碑は、四国の八十八ヶ所霊場を巡礼することによるもので、宝泉寺境内周辺では第六十九番から八十八番まで建立してある。第一番から第四番は広瀬の覚皇院（かつこういん）の境内にあり、第一番には「天保三年三月二十一日」（1832 年）、「石大工 火野尾・善右エ門」の記年銘がある。日野尾の地藏堂内には第五番、第六番が建立してある。宝泉寺の古文書には、祐瑞律師が寛政二年（1789 年）に四国の八十八ヶ所霊場参拝も願い出ている。天明三から七（1783 から 1789）年までは大飢饉があり、その供養塔であるとも思われている。古文書には祐瑞律師が飢饉のための救済の願い書を天明六（1786）年に出している記録がある。

門前町で、この南無大師遍照金剛碑が建っているのは次の所である。覚皇院、総持寺祖院、亀山墓地、古和秀水、高尾山、和田山坐禅石、道下、林墓地、宝泉寺。

大きさの例として六十九番碑の寸法は、高さ 86.5 cm、幅 18.2 cm、奥行き 17.5 cm となっている。

「総持寺周辺、南無大師遍照金剛碑、配置場所」（1988 年）という鍛冶多三郎さんが書いた資料に、「南无大師遍照金剛」という文字の説明がなされている。「南无」は梵語で **namas** を表し、「大師」は仏の尊称であり、「遍照金剛」とは、光明があまねく照らし、その本体の不壊であることを表す語で、大日如来の密号であるとしている。これは、宇宙と一体と考えられる汎神論的な密教の本尊であり、その光明があまねく照らすところから遍照または大日といい、智を象徴する金剛界と理を象徴する胎藏界との区別によって二種の尊像、「遍照如来」「毘盧遮那」がある。



写真 6：南無大師遍照金剛碑

2018 年 8 月 21 日 筆者撮影（写真 6）

Yさん（日野尾、男性、60歳代）によると、門前地区にあるこの八十八基の南無大師遍照金剛碑を巡礼すると、Yさんが製作した巡礼をしたことを意味する証書が私的ではあるが贈られるという。

表1 総持寺周辺の南無大師遍照金剛碑の配置場所

第1番	広瀬 覚皇院	第45番	高尾山観音堂前
第2番		第46番	
第3番		第47番	
第4番		第48番	
第5番	日野尾 地藏堂内	第49番	高尾山参道
第6番		第50番	
第7番	慈雲閣	第51番	
第8番		第52番	
第9番		第53番	
第10番		第54番	
第11番		第55番	
第12番	観音山墓地	第56番	
第13番		第57番	
第14番		第58番	
第15番	鬼屋 神明宮前	第59番	
第16番	札ぬき地藏付近	第60番	
第17番		第61番	鬼屋 田旗家地藏堂内
第18番		第62番	鬼屋入り口（鶴山のぼり口）
第19番		第63番	
第20番	古和秀水	第64番	芳春院入り口
第21番		第65番	坐禅石
第22番		第66番	
第23番		第67番	興禅寺地藏堂内
第24番	高尾山観音堂前	第68番	宝泉寺（六十〇?と読めるもの）
第25番		第69番	宝泉寺境内
第26番		第70番	番号不明な一基が存在
第27番		第71番	宝泉寺境内
第28番		第72番	道下墓地道路
第29番		第73番	寺津家横道路
第30番	高尾山参道	第74番	鉄川町庚申塔と並んで

第 31 番	高尾山観音堂前	第 75 番	
第 32 番		第 76 番	道下墓地内道路
第 33 番		第 77 番	
第 34 番		第 78 番	
第 35 番		第 79 番	
第 36 番		第 80 番	道下墓地内道路
第 37 番		第 81 番	
第 38 番		第 82 番	宝泉寺裏山
第 39 番		第 83 番	
第 40 番		第 84 番	
第 41 番		第 85 番	
第 42 番		第 86 番	
第 43 番		第 87 番	宝泉寺境内
第 44 番		第 88 番	

出所：「総持寺周辺、南無大師遍照金剛碑、配置場所」（1988 年）

6. 庚申講、庚申塔について

「門前本山附近を中心に見られる石塔」（1988 年）という鍛冶多三郎さんが書いた資料によると、庚申信仰とは 60 日に一度巡ってくる庚申の日に、一夜眠らずに健康長寿を祈る信仰で、人生短命にする原因をなくし長生きにする道教の信仰である。この信仰は、室町時代の半ば頃からであると述べられている。

門前公民館二階の展示室にある庚申講についての紹介コーナーに「庚申講用具一式（鬼屋・日野尾）」として用具が展示されている。この展示によると、庚申講は道教に由来する禁忌で、つぎのような謂れがある。庚申の日の夜は、人が眠っている間に体内にいる^{きんき}三戸の虫が抜けだして、その罪を上帝に告げるとも、^{さんし}三戸の虫が人の命を短くするともいわれていた。寿命が縮まらないように、庚申の夜は^{さんし}三戸の虫が体内から抜け出さないように眠らずに一夜を明かす集まりが庚申講だった。日野尾集落では昭和 20（1945）年ごろまで庚申塔の前で庚申講が行われていた記録がある。お講の性格も変化していたのか、昭和期の庚申講は作物の神様のお講のように捉えられていたようである。

「鬼屋郷土史研究会会報 4 号」（2016 年 4 月 1 日）によると、「庚申（かのえのさる）」は干支の一つで 60 年に一回巡ってくる。干支はただ年だけでなく日にもある。「庚申の日」というのがあってこれも 60 日に一回巡ってくる。60 日であるから約 2 か月に一回巡ってくる。よって一年に約 6 回「庚申の日」があることになる。人々は庚申の日は虫が身体から抜け出さないように徹夜して語り明かしたわけである。さらにはこれを三年間（18 回）続ければ願いが成就できるとして、地区や班で夜通しの集まりをしたのが庚申講である。「庚申塚」は三年間の心願成就の結晶であり、旧門前町には門前と日野尾に塚がある。

Yさん（日野尾、男性、60歳代）によると、日野尾の庚申講は、太平洋戦争末期の昭和20（1945）年前後くらいまでは行っていたのではないかという。

Nさん（鬼屋、男性、70歳代）、Mさん（鬼屋、男性、60歳代）は、鬼屋地区には庚申講の守り本尊が2つあり、庚申講は昔の人たちにとって交流の機会としても楽しんでいたのではないかと述べられていた。



写真7：庚申塔

2018年8月21日 筆者撮影（写真7）

7. 考察

今回、門前地区の中でも日野尾の地蔵講、南無大師遍照金剛碑、庚申講にスポットを当てて調べてきた。この3つについて一つずつ考えていきたい。

まず、地蔵講については、お地蔵さんを供養するために昔から行われてきた地蔵講が今でもなお行われていることに魅力を感じた。地蔵講を行うために稽古をしてきて、各自が道具をそろえ、現在でも行われているのは、やはり昔からある日野尾の生活のなかでの慣習であり、これを普通のことのようになっているからであると思う。加えて、この慣習の中にもそれぞれが地蔵講を行う楽しみを感じていて、今後に残ってほしいという気持ちがあるから現在まで残っているのではないかと考える。地蔵講はその土地の人たちが集まり、会話を楽しむという人と人とが関われる一つの機会としての役割も担っているのではないかと感じた。しかしながら、現状をみると、20人以上いた地蔵講の講員も今では5人ほどになり、年々人数が減少しているのも事実である。現在も地蔵講を行っている人たちは、この行事がこれからも残ってほしいと思っているが、これから受け継いでいける若い人がいないのは悲しい。将来は庚申講のように行われなくなる可能性も少なくはないと考えられる。ここから先どのようにしていけば、講員の思いが続いていくのか考える必要

があるのかもしれない。

次に、南無大師遍照金剛碑については、四国の八十八ヶ所霊場を巡礼することによるもので、この八十八基の南無大師遍照金剛碑を巡礼すると四国の八十八ヶ所霊場を巡礼したことになるというのは、率直におもしろいと感じた。四国を巡礼したいと思っている人がいても簡単なことではないので、ここで巡礼を体感できるのは門前の魅力的なスポットの一つではないかと思う。また、巡礼すると証書がもらえるというアイデアは、巡礼のやる気にもつながり、運動のきっかけにもなると思うのでおもしろいと思った。

庚申講、庚申塔については、庚申講は現在では行われておらず、庚申塔だけが形として残っている。庚申塔という石碑が目に見える形として残っていたからこそ、自分は興味を持って調べることができたので、今後も誰かの興味のきっかけとしてや、このような庚申講が以前にこの場所で行われていたことの形として、守っていくことが大切なのではないかと考えた。

地蔵講、南無大師遍照金剛碑、庚申講の 3 つについて述べたが、このようなお講や石碑は門前地区の貴重な財産であることは間違いないと思うので、どのようにして後世に伝え、残していくのか考えることが必要になってくるのではないかと思います。

8. おわりに

今回、実習をするにあたって門前町は何度か訪れたことのある能登の方の田舎というのが正直なところだった。しかし、一週間の実習を通じて、門前地区には好奇心をそそる魅力がたくさんあることに気づくことができた。緑に囲まれ、海も近くにあり、総持寺のような歴史あるものにも数多く触れられることができたのは、貴重な経験になった。実習ということでこの門前地区について全然わからなかった自分たちに優しく、温かくお話をしていただけたことは本当に嬉しく、充実した日々であった。

今回調べた、地蔵講、庚申講といったお講の存在は、この実習で初めて知ることができ、南無大師遍照金剛碑や庚申塔といった石碑についても自分から興味関心を持って調べることができたので、自分の知らなかったことが楽しく学べるいい経験になった。

調査に協力していただいた門前地区の皆さんのおかげで、とても充実した調査実習になった。最後になりますが、未熟な聞き取りにも関わらず、温かく迎え入れてくれた門前地区の住民の皆様にご心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。